

國學院大學學術情報リポジトリ

「AっBり」型のオノマトペ：基本要素との関わり： 特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 正弘, Ono, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000418

「AっBり」型のオノマトペ

— 基本要素との関わり —

一、はじめに

いわゆる「AっBり」という形態パターンを持つオノマトペがある。「ぐったり」「びっくり」などが、その例である。小野正弘（二〇一八）では、オノマトペが基本要素から、加工と展開を経て、現実の文の要素として実現にいたるプロセスを提唱した^[1]。前掲の「ぐったり」「びっくり」で説明すると、これらは、それぞれ、「ぐた」と「びく」を基本要素として、そこに、「促音挿入／り付加」という加工がなされて、「ぐったり」と「びっ

小野正弘

くり」が形成される。さらに、それぞれ、「と付加」「サ変動詞付加」のような実現のためのプロセスを経て（なお、この場合、展開のプロセスはなにもない、すなわち「ゆ」「ぐったり」と「椅子にもたれる」）「（寒暖計の示す気温に）びっくりする」のよう^な、現実の文におけるオノマトペとして運用されるのである。ところが、小野（二〇一八）でも述べたように、「AっBり」型のオノマトペのなかには、「がっかり」のように、ここから基本要素を取り出そうとすると、「がが」のような、他に「がかつ」「がかん」「がかり」「ががが」のようなオノマトペをつくり出してみると、なじみのないものとなったり、違和感を生じた

りするものがある。⁽²⁾そこで、本稿では、「AっBり」型のオノマトペが、基本要素との関わりで、全体としてどのような様相を呈するのかを報告し、考察することにした。

二、全体的分析

このような問題に関心を持った先行研究は、管見ではあるが、守山恵子(二〇〇二)を数えるのみである。しかし、この守山(二〇〇二)では、「AっBり」型オノマトペをかなり包括的に扱っていて、参考とすべき点も多い。概要を摘記すると、次の通りになる。

- ・『広辞苑』第五版、ならびに、オノマトペ辞典三種を用いて、「AっBり」型⁽³⁾オノマトペを認定すると、一六三語のオノマトペが得られる。
- ・これらについて、対応する「ABり」「ABAB」パターンの有無を確認し、さらに、その「AB」が、意味的に対応関係にあるかどうかを、判断した。
- ・「AっBり」に対応する「ABり」「ABAB」が確認できないもの二五語をIグループと名付け、「AっBり」に意味的にも対応する「ABり」「ABAB」が認められるもの

の二八語をIIグループと名付けた。このIグループとIIグループは、「AっBり」がオノマトペとして解されるか否かについて対極にあると想定される。

- ・IグループとIIグループから、あわせて五一語を選んで、アンケートを実施した。その結果、個別的な個々の語では、出入りがあるものの、「AっBり」に対応する「ABり」「ABAB」のあるIIグループのほうが、オノマトペとして意識されやすいことが分かった。

最後に、「AっBり」型オノマトペを、日本語教育で教授してゆく際に心がけておくべきことについて提言する。

具体的で個別的な語レベルでの対比は、のちに行なうこととしたいが、次に、今回の分析の概要を述べる。

- ・まず、『日本国語大辞典』第二版(以下「日国第二版」と略記)の、JapanKnowledge版の検索を利用して、「り」で後方一致し、かつ、「っ」で部分一致するものを求めた。すると、一〇七九の見出し語(以下、簡略して「語」と称する)が求められた。さらに、「AっBり」型のオノマトペは、副詞として機能することが普通なので、品詞名「副詞」でしぼった。すると、三五七語が得られた。
- ・この三五七語のなかには「からっきり」「ほねっきり」(骨

切り)のような、明らかにオノマトベではないもの、「いっくりがっくり」のようなふたつの「AっBり」型が複合したものが含まれているので、目視によって、前者は排除し、後者は、「いっくり」と「がっくり」のように単体として分割し、すでに、単体に含まれていれば、それに組み入れた。さらに、「あつさり」「うつつり」「ふつとり」「ほっそり」「やつぱり」「ゆつくり」は、それぞれ、「浅」「薄」「太」「細」からの派生、ならびに「やはら」からの転成、「ゆくり」への促音挿入と見て、除外した。

その結果、今回は、全体として「二九一語」⁴⁾が得られた。これが、本論文の分析対象の母集団となる。

・この二九一語の「AっBり」型のオノマトベについて、対応する「ABAB」「ABBr」「ABん」「ABっ」があるかどうかを、前述の検索システムを利用して確認していった。

要するに、守山(二〇〇二)との違いは、根本となる資料が、『広辞苑』第五版か『日国第二版』かということと、「AっBり」と対応するオノマトベを「ABAB」「ABBr」「ABり」で考えるか、さらに「ABん」「ABっ」まで拡充するかということである。⁵⁾さて、二九一語の「AっBり」型オノマトベについて、対応

する「ABAB」「ABBr」「ABん」「ABっ」の有無を基準に分類すると、三群に別れる。すなわち、「ABAB」「ABBr」「ABん」「ABっ」の四種とすべて対応するか、そのうちの三種類と対応するもの(これを、いま、「a群」と呼ぶ)、次に、このうちの二種類か一種類と対応するもの(これを、いま、「β群」と呼ぶ)、さらに、「AっBり」と対応する「ABAB」「ABBr」「ABん」「ABっ」がないもの(これを、いま、「γ群」と呼ぶ)、の三群である。それぞれの数的分布は、次の通りである。

a 群	七九	(四種すべてに対応	三六、三種と対応
		四三)	
β 群	一三九	(二種と対応	七一、一種のみ対応
		六八)	
γ 群	七三		

最も多いものは、β群の一三九語であり全体の47・8%と約半数にのぼる。その内訳を見ると、二種に対応するものが、一種のみ対応するものとがほぼ拮抗している。a群は七九語27・1%であり、四種すべてに対応するもの三六語12・4%を、三種に対応している四三語14・8%と比べると、若干低めである。また、γ群は七三語で25・1%となっている。以下、各群に分

けて、詳しく見ていくことにしたい。

【*a*群】*a*群の七九語のうち、「ABAB」「ABR」「ABn」「ABつ」の四種すべてに対応しているもの（以下、「*a*—4」と呼ぶ）は、三六語である。具体的には、次のものである。

がつくり がつたり かつちり ぎつくり きつちり
くつしやり ぐつしやり こつくり ごつくり ずつしり
すつぱり ちつくり ちよつきり ちよつこり どつかり
どつきり どつきり どつたり のつそり ぱつたり
ぱつたり ぱつちり びつしやり びつたり びつちり
ひよつこり びよつこり ぶつくり ぶつたり べつたり
ぼつかり ぼつきり ぼつこり ぼつこり ぼつちやり
ぼつたり

すなわち、これらは、たとえば、「がつくり」に対応する「がくがく」「がくり」「がくん」「がくつ」のすべてが、「日国第二版」に見出し語として立項されているものであり、それぞれの基本要素（「がつくり」でいえば「がく」）が、十分な生産性を持つていると言つてよいものとなる。さらにいえば、「がくん」のような基本要素に「撥音付加」するタイプのものは、*a*群・*β*群の全二一九語のうち、五九語しかないもので、その半数以上が、この*a*—4に所属していることになる。

これらと、守山（二〇〇二）のⅡグループ二八語とを比較してみよう。具体的には、次の通りである（掲載順は、同論文におけるもの）。

こつくり どつしり ぼつちやり がつくり がつちり
がつたり ぎつくり さつくり によつきり ばつきり
ぱつちり ひよつこり ぶつたり かつちり ぐつたり
ざつくり ずつしり すつぱり どつかり どつきり
どつきり につこり のつそり ぱつくり ぱつたり
ぶつたり べつたり ぼつきり

a—4と共通するものを太字にしてみると、一六語を数える。意外に重ならないようにも思われが、このⅡグループは、そもそも「ABAB」「ABR」との対応があるという基準のみで認定されているのであるから、当然といえば当然であろう。ここでは、とりあえず、重なり具合を確認したということ、次に進みたい。

*a*群の七九語のなかで、「ABAB」「ABR」「ABn」「ABつ」の四種のうち、三種と対応している四三語（以下、「*a*—3」と呼ぶ）について見てみる。まず、それぞれの対応パターンに、どれぐらいの数があるのかを示す。

「A B A B」「A B り」「A B ん」と対応

（「A B っ」欠） 一二

「A B A B」「A B り」「A B っ」と対応

（「A B ん」欠） 三〇

「A B A B」「A B ん」「A B っ」と対応

（「A B り」欠） 一

「A B り」「A B ん」「A B っ」と対応

（「A B A B」欠） 〇

こうしてみると、 $a-3$ は、「A B ん」が欠けているものが最も多く、これに「A B っ」が欠けている場合が次ぎ、「A B り」が欠けているものは、わずかに一語、「A B A B」が欠けているものはないという結果になった。

その「 $a-3$ で「A B り」欠」に属するものは、「ぼっちり」である。これに対応する「ぼちり」が「日国第二版」では立項されていないのである。ただし、「ぼちり」そのものは、「青空文庫」などを検索すると、近代の文学作品での例が見られるものである。⁸⁾

次に、「A B っ」のみにないものを見る。これに属するものは、
 かったり がっちり こっちり こっつり ごっつり
 こっとり ごっとり ずっさり どっしり ぶっつり

ぼっちり ぼっつり

の一二語である。これらもまた、「日国第二版」では、「かたっ」「がちっ」「こちっ」「こっつ」「ごっつ」「ことっ」「ごっつ」「ずきっ」「どしっ」「ぼちゃっ」「ぼっつ」が立項されていないことから、ここに分類されるものであるが、「がちっ」は、『デジタル大辞泉』なら立項があり、また、「かたっ」「がちっ」「こっつ」などの例は、「青空文庫」を検索すると見つかる。また、前述の守山（二〇〇二）のⅡグループと共通するものを太字にした。ここでは、三語が該当する。

$a-3$ の最後に、「A B ん」のみにないものを見る。これに属するものは、

うっかり がっさり ぐっさり ぐったり ぐっちゃり
 けっそり げっそり こっそり ごっそり すっかり
 すっぱり ぞっくり にっこり にったり ぱっかり
 ぱっくり はったり びっかり びっくり びっしり
 びっしり ひよっくり ぶっすり べったり ぼっさり
 ぼったり みっしり むっくり むっつり もっさり

の三〇語である。これらも、「日国第二版」で、「うかん」「がさん」「ぐさん」「ぐちゃん」「けそん」「げそん」「こそん」「ごそん」「すかん」「すばん」「ぞくん」「にこん」「にたん」「ばか

ん」「ぱくん」「はたん」「ぴかん」「びくん」「びしん」「ぴしん」「ひょくん」「ぶすん」「べたん」「ぼたん」「みしん」「むくん」「むつん」「もさん」が立項されていないことによつて、ここに分類されているわけであるが、前に見た「ABつ」が立項されていないものと比較して、こちらの「ABん」が立項されていないほうは、納得できるものが多いように思われる。なかに、「ぐちゃん」「すばん」「ぞくん」「びくん」などは、たとえば、マンガなどには使われていても違和感がないようにも思われるが、数としては少ない。

これは、オノマトペの基本要素に「撥音付加」したものの全体として考えるべきことであるが、そもそも「撥音付加」を許すような基本要素は少ないのか、また、許すような基本要素と、許さないような基本要素には、なにか違いあるのか等、まだまだ解明されるべき問題であらう。また、一方では、これほどまでに基本要素に「撥音付加」されたオノマトペが肥沃な未開の地として残っていると見ることもできる。このことはまた、オノマトペのポテンシャルが、まだまだ高いことの証左でもあらう。なお、太字になっているのは、守山(二〇〇二)のⅡグループと対応するものである。ここでは、五語が対応している。

【β群】次に、「AっBり」型のオノマトペが、「ABAB」「A

Bり」「ABん」「ABつ」の二種あるいは一種に対応するもの、一三九語について細かく見てゆく。β群の数的分布は次の通りである。

・二種に対応しているもの(以下、「β―2」と呼ぶ) 七一

「ABAB」「ABつ」と対応 五

「ABAB」「ABん」と対応 七

「ABAB」「ABり」と対応 五八

「ABん」「ABつ」と対応 一

・一種のみに対応しているもの(以下、「β―1」と呼ぶ)

六八

「ABつ」のみと対応 三

「ABん」のみと対応 〇

「ABり」のみと対応 四

「ABAB」のみと対応 六一

これを見ると、二種に対応しているもののなかでは、「ABAB」「ABり」と対応しているものが最も多く、一種のみに対応しているもののなかでは、「ABAB」と対応しているものが最も多いことがわかる。

「ABAB」「ABつ」と対応する五語は、

すつきり すったり びつとり むつしり もつこり

であるが、これらには、たとえば、「すつきり」に対応する「すきすき」と「すきつ」はあるが、「すきり」「すきん」はない。

「すつきり」に対応する「すきすき」というのは、現代ではあまり親しみのないものであるが、中世から近世にかけて、

○ 目尻^{まじり}を剃刀^{かみそり}にて切りひろげて、我らが、名譽^{かうやう}の膏藥^{かうやう}をつけてをけば、二三日の間にすきくとなをる（『昨日は今日

の物語』下・62、日本古典文学大系100、一四〇頁）

のような例がある。これは、目尻を剃刀で切つて目を大きく見ひろくようにしておき、名高い膏藥をつけておけば、二三日であとかたもなく治る、という（でたらめな治療の）例である。

「すきすき」の基本要素「すき」は、さらに「すきと」という言いかたも派生し、

○（借手）「扱もく忝なひ、ぎばが薬も、これほどにはき、まらすまひ（貸手）「すきとよひか（借手）「中々すきと

本腹いたひた（大倉虎明本狂言『むねつき』、池田・北原『大蔵虎明本狂言集の研究本文編 下』一〇七頁）

のような例も見出せる。これらを通覧すると、基本要素「すき」には、（なんの跡形もない様子）という意味が想定され、「すきと」「すきすき」「すつきり」「すきつと」のようなオノマトペ

群を形成したものと考えられる。このうち、現代では「すきと」と「すきすき」が耳遠いものとなったため、全体的なつながりが分からなくなってしまうのである。ここでは、「すつきり」を例として述べたが、以上のことから、オノマトペは、現代の様相ばかり見ていては、基本要素を中心とする結びつきが分からなくなる、換言すれば、オノマトペは史的に分析・考察する必要がある対象であることが改めて理解できる。とはいえ、この場で、個別的な問題をいちいち詳しく述べているいとまはないので、一端をのべたというにとどめて、先に進みたい。

「ABAB」「ABん」と対応する七語は、

がつしり がつり こつてり しゃつきり つつくり
つつけり でつくり

である。なかで、「つつくり」「つくつく」「つくん」「つつけり」「つつけ」「つけん」の組み合わせは、現代では馴染みのないもののように思われる。「日国第二版」の解説によれば、「つつくり」は、「ひとりじつとしてゐるさま、特になすこともなく、あるいは思いに沈んでたえずむさまを表わす語。つくねん。つくくと、「つくつく」は「まっすぐに、よくのびるさまを表わす語」「つくん」は「まっすぐにつき立っているさまを表わす語」とされている。ここから、基本要素「つく」の意味を想定して

みると、《身動きせずにじっとたたずむ様子》のようなものが考えられる。また、同様に「日国第二版」では、「つつけり」は「遠慮なくありのままをきっぱり言うさまを表わす語。つけ。ずつけり」、「つけつけ」は、「遠慮や加減なしに言うさま、感情を丸出しにして思った通り言い切るさまを表わす語。づけ。つけ」、「つけん」は「言葉遣いに愛想がなく不快な印象を与えるさまを表わす語」とされる。ここから、基本要素「つけ」の意味を想定してみると、《遠慮や愛想なしに思った通りに言い放ったり行動したりする様子》のようなものが考えられる。なお、「つけん」は「日国第二版」の親見出しから、東北方言への参照もあり、オノマトベの基本的意味を考える際には、現代・方言・過去を総合的に考察しなければならないということも分かる。

「ABん」「ABっ」と対応するものは、「どってり」の一語だけである。また、これは、ほかのβ-2が必ず「ABAB」の対応を持つのに、これだけが持っていないという意味でも珍しいものである。すなわち、「どてどて」という二回繰り返しのパターンが立項されていないのである。「日国第二版」の解説では、「どってり」は、「人の肥満したさまを表わす語。でつぷり」、「どてん」は「あおむけにひっくりかえるさまを表わす

語。また、行儀悪くすわり込んだり、ひっくりかえったり、ねころんだりするさまを表わす語」、「どてっ」は「行儀悪く、または、大柄な体を横たえるさまを表わす。どでんと」を意味するとあるから、「どてどて」で、へいかにも身が重そうに進む様子」のような意味で用いられてもよさそうなのではある。

次に、β-2の最大勢力である「ABAB」「ABり」と対応する五八語を見てみたい。

うつとり かっさり きっくり きつしり ぎつしり
ぎつちり ぐつすり くつたり くつつり こつきり
ごつきり さつくり ざつくり さっぱり しっくり
じつくり じつたり しつとり ずつかり ずつけり
そつくり だつくり ちゃつきり ちゃつくり
につちやり によつきり によつこり ねつつり

のつしり のつたり ばつさり ばつさり びつしやり
ひつしり ひつそり ひつたり びつたり びつちより
ふつつり べつそり へつたり べつちやり ぽつかり
ほつくり ほつくり ぽつくり ほつしり ぽつたり
ぼつちり ほつつり ぼつとり みつちり めつきり
もつくり もつそり ゆつくり ゆつさり ゆつたり
個々の語にコメントすることは、紙幅の都合上控えるが、こ

の語群においても、実は、「ABっ」や「ABん」を認めてもよさそうなのが散見される。今回の分析は、あくまでも「日国第二版」から見た認定であるから、いたしかたないが、逆に、基本要素のほうから見た認定を一覧表にしていくなことが望まれる。なお、太字は、守山(二〇〇二)のⅡグループ二八語と共通するものであるが、ここに至って、すべての語が一致した。すなわち、守山(二〇〇二)のⅡグループは、史的に見れば、 $a-4$ から $\beta-2$ までの広がりになかにあったものであり、さらに多くのものが追加できるものであったことになる。もちろん守山(二〇〇二)は、「AっBり」型のオノマトペを日本語教育でどのように扱うかを最終目標にいたったものであり、本論文は、日本語の歴史における「AっBり」型オノマトペの解明を目標にしているのであるから、拠って立つ基盤がそもそも異なっている。相互補完する関係にあると前述した所以である。

さて、 β 群の分析の最後に、 $\beta-1$ を瞥見しておく。

「ABっ」のみと対応するものは、三語で、「きっかり」「のっぺり」「べっそり」である。「ABん」のみと対応するものはない。また、「ABり」のみと対応するものは四語で、
きっぱり ずっぱり ちよっぱり ちよっぱり

である。なかで、「そっくり」に対応した「そくり」について、「日国第二版」は、「そっくり」の変化した語」と解説するのみで、見出し語はあるが用例はない。「ABAB」のみと対応するものは、次の六一語である。

いっそり	うっそり	うっぱり	えっちり	がつきり
かつくり	がつぶり	ぎっすり	きっそり	ぐっしより
ぐっしり	ぐっちより	ぐつつり	ごつてり	しっこり
じっこり	じつとり	しっぱり	すっくり	ずっくり
たっぱり	ちっこり	ちよっくり	でっこり	でっぱり
とっちり	にっしり	にっとり	ぬっくり	ねっそり
ねっちり	ねっとり	のっこり	はっきり	はっしり
ばっちり	ひっかり	びっしより	びっちり	ふっくり
ふっさり	ぶつてり	べっかり	へっこり	へっとり
べっとり	ほっかり	ほっこり	ぼっさり	ぼっしり
ほったり	ほっちり	ぼつてり	ほっとり	むっさり
むったり	めったり	やっきり	ゆっすり	わっさり
わったり				

なかには、「うっぱり」「うばうば」と対応、(水面にものが浮かびたよう様子)のような、今日では目にするものがほとんどないものもあり、また、「かつくり」のように、「かくか

く」が想定できるほかに、「かくん」「かくつ」のような、基本要素「かく」に「撥音付加」「促音付加」したものもありうるのではないかと思われるものも含まれるが、何度もうり返しているように、それは今回の「日国第二版」の認定と関わる問題であって、さらなる検討が今後の課題となる。

【?群】全体的分析の最後に、?群、すなわち、「AっBり」型でオノマトベとしての特性を有しているように思われるにも拘わらず、「ABAB」「ABり」「ABん」「ABっ」のすべてが「日国第二版」では認められていないものを見てみる。具体的には、次の七二語である。

あっかり	いっくり	おっちり	おっとり	がっかり
かっきり	かっしり	かっつり	がっぼり	きっさり
くっきり	くっさり	げっくり	げったり	ごっかり
こっぺり	こっぼり	ざっぶり	しっかり	しったり
じっちり	しっぼり	しゃっぶり	しゅっくり	
しよっぼり	ずっこり	ずったり	ずっぼり	すっぺり
ずっぼり	そっこり	ぞっぺり	たっしり	ちっぼり
ちゃっかり	つつきり	つつべり	つつぼり	てっかり
でっかり	てっきり	てっくり	てっしり	でっしり
でっちり	てっつり	とっくり	とっけり	どっちり

とっぶり ぶっぶり ぶっべり によっぼり ぬっきり
ぬっけり ぬったり ぬっべり ぬっぼり ねっこり
のっちり のっとり のっぼり ふっちり ふってり
べっとり ほってり まったり むっちり もってり
やっしやり やっぼり らっくり わっちり

これを眺めてみると、たとえば、「おっとり」「がっぼり」「とっくり」「ぶっぶり」「まったり」のような親しみのあるものと、「あっかり」「きっさり」「つつべり」「らっくり」のような、現代ではまず目にするこないものが混在していることが見てとれる。また、「あっかり」「かっつり」「げったり」「ずったり」「ずっぼり」「そっこり」「つつきり」「のっちり」などは、方言としての性格も有しているようである。さらに、これらは、「日国第二版」では「ABAB」「ABり」「ABん」「ABっ」が対応しないといえながら、たとえば、「がっぼり」だと、対応する「がぼがぼ」「がぼっ(と泥にはまる)」等が想定できる。すなわち、このリストにはさまざまな要因と問題が共存していて、このままでは渾沌としたものである。しかし、そもそも、「日国第二版」のなかの「AっBり」型のオノマトベで「ABAB」「ABり」「ABん」「ABっ」型が立項されていないもののリストが提示されたこと自体が初めてであろうから、ここ

が個別的な分析のスタート地点なのである。

三、おわりに

今回は、「AっBり」型のオノマトベを、「ABAB」「ABり」「ABん」「ABっ」との関わりから考察し、階層化した。それを通して、「AっBり」型のオノマトベから得られる基本要素の生産性が確認でき、「AっBり」型のオノマトベを史的に考察する意義も改めて確認できたのではないかと思う。また、その途上で、「日国第二版」のオノマトベの見出し語立項の問題も見えてきた。これは、オノマトベの辞典を作っているものとしても、考えるべき点であろう。オノマトベの基本要素を求めて、それがいかなる加工と展開をなしているのかを見据えたうえで、具体的な見出し語を体系的に配する必要がある。いや、むしろ、オノマトベの基本要素を並べて、それらはどのような加工と展開が可能なのかという観点からのオノマトベ辞典が求められよう⁽¹⁰⁾。実際、そのような辞典を編んでみたいと思う。

また、さらなる課題として、「AんBり」のような、「撥音挿入／り付加」のタイプだと、今回と比較してどうなるかということも考察する必要がある。

注

- (1) この発想自体は、小野正弘(二〇一一)で提唱しているものである。なお、川越めぐみ(二〇二二)でも同様のプロセスを提唱しているが、具体的なプロセス設定等には違いがある。
- (2) これらのなかには、たとえば、マンガなどのなかでは、十分に使えるのだと思われるものもある。なお、このようなものを、小野(二〇一八)では第三類と呼んでいる。
- (3) 守山(二〇〇二)では、「CVQCVり」型と呼んでいるが、いま、便宜のために統一した。
- (4) 守山(二〇〇二)にあつて、今回の分析で対象としていないもの、すなわち、『広辞苑』第五版では認定しているが、『日国第二版』では認定していないものは、「ひっくり」と「ぼっくり」の二語であつた。「ぼっくり」が『日国第二版』にないのは、意外に思われる。
- (5) また、「あっさり」は、守山(二〇〇二)をはじめ、オノマトベとして扱われることが多いのであるが、今回は除外して考えた。
- (6) 根本資料を『日国第二版』に求めたことにより、対象となる語数が格段に増えたこと、および、新たに「AっBり」と対応する「ABAB」「ABり」が見出されたこと、対応する「ABん」「ABっ」の情報が増えたことは、一歩進めることができたことではあるが、今回はオノマトベ意識のアンケートは行なわず、史的な分析を専らにしていることから、本稿と守山(二〇〇二)は、互いに補完の関係にあると考えている。なお、『日国オンライン』のサービスは、二〇〇七年から開始されたので、今回はその恩恵にあずかることができた。
- (7) 「AっBり」と対応する「ABAB」「ABり」「ABん」「ABっ」の有無は、『日国第二版』に立項されているか否かで判断しているが、『日国第二版』に立項されていなくとも、内省によれば可能であるように思われるものもあつた(注4も参照)。が、今回は、まずは、『日国第

「二版」を基準とするとうなるのかという点で統一することにし、見出された問題点は次の段階で考察することにした。

(7) このほか、たとえば、「がく」は、「がっくん」のような「促音挿入／撥音付加」、「がくつく」のような動詞化なども可能である。

(8) ここまでくると、問題は、辞書がオノマトベを体系的に立項しているのかということになってくる。奇妙な話だが、これによって、なにを見出し語として立項すべき(だった)かという問題を結果的に考えてしまっていることになる。

(9) 「日国第二版」では、「どっしり」の「どしつ」、「さっくり」の「さくん」「さくつ」が認められていない。「さくん」は確かに多少違和感があるが、「どしつ(とした態度)」「さくつ(とクッキーをかじる)」のようなものは問題ないようにも思われる。が、注6にも述べたように、それは今回の分析の限界とせざるをえない。

(10) その際、角岡賢一(二〇〇三)が述べるような、オノマトベの基本要素(語基)の持つ多義性を、どのように取りさばくかということも課題となる。

参考文献

小野 正弘(二〇一一)「オノマトベ素の加工と展開―近代小説を視野に入れながら」日本近代語研究会二〇一一年度秋季発表大会資料

(二〇一八)「宮澤賢治初期童話作品のオノマトベ―基本要素からの加工と展開―」小林隆編『感性の方言学』ひつじ書房

角岡 賢一(二〇〇三)「日本語オノマトベ語基の多義性について」『龍谷大学国際センター研究年報』12

川越めぐみ(二〇一二)『東北方言オノマトベの形態と意味』博士学位論文、東北大学

田守 育啓(一九九三)「日本語オノマトベの音韻形態」、寛寿雄／田守育

啓編『オノマトビア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房
守山 恵子(二〇〇二)「CVQCVリ」型のオノマトベ」『長崎大学留学
生センター紀要』10